

# インド仏教における「経」とは

ナリニ・バルビール

## 語源的考察

ヒンズー教の古典的用法において、サンスクリットのストラ *śūtra* という言葉は、諸学問の基礎となる綱要書に碑文体のような簡潔な文体で書かれた格言を意味していた。例えば文法の分野やヨーガ (*Yogaśāstra*)、性愛 (*Kāmasūtra*) の分野である。語源的に、ストラという言葉は「糸」を意味し、ヒンズー教の文脈においては、例えば「頌歌が、糸の上の真珠のように、あるいは真珠に通された糸のように」〔数珠つなぎになってい

る〕<sup>(1)</sup>と表現されている。また、これに関連するイメージを織物の世界から借りてきたものが、現代の「テキスト」という言葉の土台となっている。<sup>(2)</sup>

インド仏教の言語として、テーラワダー仏教ではパーリ語が、その他の宗派ではプラークリット・ガンダーラ語やサンスクリットが使われており、<sup>(3)</sup>単語もそれぞれ独自の意味をもつように変化している。一般には、パーリ語のスタ *stā* が、サンスクリットのストラ *śūtra* に当たるとされているが、しばしば提唱されてきたのは、スタにより近いサンスクリットは、スーク

「*sūtra*」巧みに語られたこと」ではないかということである。これは、ヴェーダの賢者たちの言葉について用いられた語である。このような仮説は、異論がないわけではないにしても、注目に値する。というのも、パーリ語のテキストにおいては、新しい解釈を与える際に、しばしばヴェーダの用語が使われているからである。

## No Image

ガンダーラ語「ダルマバダ」写本（1-2世紀の書写）。カロースチューター文字。45×24 cm。漢訳の『法句経』に当たる

(注3を参照)

### その用法と伝承

パーリ語の最も古い原典において、仏典を構成する四つの要素 (*āṅga*) の一つとして挙げられている「スッタ」は「パーティモッカ・スッタ (*Pāṭimokkhasūta*)」(僧団内規則、具足式) を意味する。<sup>(4)</sup> すなわち、教団の規定であり、定期的に唱えられる僧団内規則集である。このような規則集の簡潔な文体は、先述したストトラという言葉が本来もつ意味を思い起こさせる。「四要素の他の用語には、「ゲーヤ (*gāyā*)」(韻文)、「ヴィヤーカラナ (*veyyākaraṇa*)」(説法)、「アドブタダルマ (*abbhūtaḍḍhama*)」(ブッタの伝説) がある。<sup>(5)</sup> この段階で、ブッタの談話や説法という概念は、「法を説き明かす」という意味の「ヴィヤーカラナ (*veyyākaraṇa*)」(説法、解説)あるいは「ダンマパリヤーヤ (*dhamaṃpariyāyā*)」(法門) などの語に内包されるようになる。

誰かがブッタに語りかけるといふ物語的な文脈での「ブッタの発言とされる言葉」を示す語として「スッタ *sūta*」やそれとほとんど同じ意味をもつ「スッタタ

「sutama」などの語を、当時の一般的な用法に従いつつ普及させるのに貢献したのが、五世紀のブツダゴーサ（佛音）をはじめとする注釈者たちであった。さらに、師ブツダとその弟子との、または説得しようとする相手との対話の場面は、バラモン教の伝承にあるウパニシヤッドの対話を思い起こさせる。このように、仏教經典スツタは、古代インドの知的環境の中にしっかりと根を下ろしているのである。

伝統的にスツタは本来、口頭で伝えられた。より厳密に言えば、スツタは、ブツダの言葉（*buddhavacana*）に直接由来する教えを集めたものである。ブツダの忠実な弟子アーナンダ（阿難）によって記憶されたブツダの教えは、ブツダ入滅直後に行われた第一回經典結集の折に集められた。紀元一世紀にスリランカで書かれたテキストには、第一回經典結集の名残として「如是我聞」（バーリ語の *evam me sutaṃ* / サンスクリットの *evam mayā sutaṃ*）という冒頭の決まり文句がみられる。ここでの「我」とはアーナンダのことである。

したがって、スツタとはまず何より、それぞれが独

立した説法、物語、問答であり、大部分は散文に記された。スツタは独特な文体で知られ、統一された決まり文句を絶えず用いることで際立っている。例えば物語の導入部などのように、語りの一連の場面（シーケンス）が同じであれば、同じ言葉で叙述される。もっとも、「經典の」編集者は登場人物の知識レベルに合わせ、話のレパートリーを使い分けている<sup>(6)</sup>。文体上の工夫によって、決まり文句は増加し、繰り返しが大規模に行われた。こうした工夫によって、スツタの目録を覚えるのと同じくらい容易に記憶にとどめられるようになったのである。

### 広がる多様性

しかしながら、各ストラ／スツタは、個性をもち、その長さも極めて変化に富んでいた。各ストラは、その名前によって識別されるわけだが、それを伝えてきた仏教の様々な宗派や言語によって多様なバージョンがある。『梵網經（*Brahmajālasūtra* / *Brahmajālasūtra*）』は、異端者の落とし穴に入らぬよう、法の基本を示して異

議を申し立てている。<sup>(7)</sup> 有名な『大般涅槃經 (Mahāparinirvāṣūtra / Mahāparinibbāsanūta)』は、シナリオ化された壮大な物語の中で、ブッダの生涯の終末期とその死、仏舎利の分散を描写している。『善生經 (シンガラ經)』は、信者の礼拝作法についての教えを含んでいる。<sup>(8)</sup> 『大念処經 (Mahāsatipaṭṭhanasūta)』は瞑想についての基本的なテキストである——等々。

また、スートラという表現形式は、律 (Vinaya 僧団内規則集) など、思いがけないテキストの中でも使用されている。<sup>(9)</sup> 「パーリ律の」経分別 (Suttavibhanga) の重要部分で、パーティモッカという僧団規則ができた背景が述べられている。そこでは、ブッダがある規則を制定する前に、多くの場合六名とされる悪僧達が過ちを犯したことを、僧団の評判を心配する高潔な僧侶や信者たちから知らされるといった状況が明確に語られている。このような逸話のいくつかが、パーリ聖典の他の部分でもみられる。なんであれ、経分別は、ブッダの典型的なものごとの進め方に関わっている。抽象的な啓示とは逆に、ブッダの教えは、教えを説いた場所と時に

根づき、そこに登場する人物たちや、彼らを取り巻く状況を考慮して説かれているのである。

もしも厳密な意味では散文形式がスートラの特徴であるとしても、それは定まった掟のようなものではない。パーリ三藏のうち「律藏に続く」二番目の経藏 (Suttapiṭaka) は、アーガマ (āgama 阿含) あるいはニカーヤ (nikāya 部) と呼ばれる五つのグループを含んでいる。それらは、パーリ語の伝承においてのみ完全な形で入手できる。インド仏教のその他の言語においては、いくつかのスタタだけが、多くの場合、個別のテキストとして今日まで伝えられてきた。経藏の初めの四つのグループである「ディーガ・ニカーヤ (Dīghanikāya 長部)」「マッジマ・ニカーヤ (Majjhimanikāya 中部)」「サンユッタ・ニカーヤ (Samyuttanikāya 相应部)」「アングッタラ・ニカーヤ (Anguttaranikāya 増支部)」に含まれるテキストのほとんどは、上に述べたような(他の言語による)經典の構成に対応している。しかし、著しく異質である五番目の「クツダカ・ニカーヤ (Kuddakanikāya 小部)」においては同じようにはいかなかった。<sup>(10)</sup>

〔仏典を分類した十二部経のうち〕「ウダーナ (Udāna 優陀那)」（自説・無問自説）や「イティヴツタカ (Itivuttaka 伊帝目多伽)」（本事・如是語）、そして経蔵のいくつかの部分だけが、語の厳密な意味におけるスツタンタ (sutanta 経) を含んでいるが、だからといって「ガーター (gāthā 伽陀)」（偈・諷頌）が排除されることはなかった。<sup>(11)</sup> 他の箇所、例えば、賢者の孤独を理想として称賛する『犀角経 (Khadgavishnastira / Khaggavisāṇṣuttā)』<sup>(12)</sup> においては明らかに韻文体が主流であり、また有名な『ダンマパダ (Dhammapāda 法句経)』においては、これが経蔵に属するにもかかわらず、詩節のみが用いられている。各グループに含まれるスートラの数やタイプは、バージョンによつて様々である。個別的なスートラのテキストについては、場合により、他と似ていたり、全く似ていなかったりする。このような考察により、共通の起源の存在を指し示すことができる。その共通の起源から長期間にわたつて、はつきり異なる伝播を経て現在の形になったわけだが、その背景には、それぞれの經典編者による独自のテキスト選択があつたことが推測で

きる。

スートラが、属しているグループから独立して、特殊な宗教的目的によつて選択されたり、あるいは一定のテーマに基づいて選択されたりして、個別に伝播する可能性もある。かくして、大乘仏教の『三昧経 (Samādhi-sūtra)』類は全て、瞑想によつて意識の深層に達することをテーマとして<sup>(13)</sup>いる。スートラは、たいていの場合、この形で仏教徒の生活において役割を果たしている。五世紀の佛音から現代の S・N・ゴエンカ<sup>(14)</sup>師や他の師たちに至るまで、注釈者は、スートラの豊かさを、次の世代の信者や読者たちに向けて説明している。「スートラ」を特徴づけているのは、そこに潜在している意味や解釈の多様性なのである。

### 聖なるテキストⅡ経

ともかく、スートラという言葉は、正式な決まりがどうあれ、それが、ブツダの言葉や法から授けられた神聖性を備えたものである<sup>(15)</sup>と信徒たちに思われさえすれば、どんなテキストをも意味することができるこ

とがわかる。例えば、タイ諸語の『ジャンプーパティ王経 (Jambhupatisūtra)』は、厳密な意味では「正典に属するもの」ではないが、古典的なスッタの叙述法で、ブツダが傲慢な王を改宗させたことを詳しく物語っている<sup>(15)</sup>。一方、その大乘經典版は基本的なテキスト、なかなかずく韻文化されたものを集めているだけなのである。

〔 〕内は邦訳に際しての補注

注

- (1) フランス語は「les hymnes sont enfilés comme la perle sur le fil, ou comme le fil à travers la perle」。  
 (原注) L. Renou による引用された Śatapatha Brahmana 12.3.4.2, Sur le genre du sūtra dans la littérature sanskrite, *Journal Asiatique* 1963, p. 200 (後に L. Renou, *Choix d'études indiennes*, Paris, EFEO, 1997, p. 604).
- (2) 「テキスト」(フランス語: *texte* 英語: *text* ドイツ語: *Text*) の語源は、「織る」を意味するラテン語「*texere*」。  
 一世紀のローマの修辭学者マルクス・ファビウス・クインティリアヌスの言葉「あなたが言葉を選んだあと、
- (3) それらは美しく精妙な布 (*texum*) のように織り合わせられねばならぬ」に由来するとされる。  
 プラークリットは、文語・雅語であるサンスクリットに対して、より口語・俗語的なインド・アーリア諸語の総称。そのひとつであるガンダーラ語は、紀元前三世紀から紀元四世紀頃まで、広く使用されていた。初期の漢訳仏典はガンダーラ語に近い音韻の特徴をもっているともされている。十九世紀末、ガンダーラ語「ダルマパダ」がフランスの探検家ジュール・ド・ムルエ・ド・ランによりホータン近辺で発見された。その後、一九九〇年代に入って、ガンダーラ語による多くの仏典が発見されている。
- (4) 「パーリ律」において戒律の解説を「経分別 (*Sūta-vibhāṅga*)」と呼ぶ。ここから、かつては「律」も「経 (*sūta*)」と呼ばれていたことがわかる。  
 (原注) 参照 O. von Hinüber, *Die neun Angas. Ein früher Versuch zur Einteilung buddhistischer Texte*, *WZKS* 38, 1994, 121-135, 後に O. von Hinüber, *Kleine Schriften*, éd. H. Falk & W. Slaje, Harrassowitz Verlag, Wiesbaden, 2009, pp. 159-173.
- (5) 後世に「九部経」「十二部経」として整理された。これは一切経を叙述形式・内容から分類したものである。ここでは、「ゲーヤ (祇夜)」「応頌・重頌」は散文の「スートラ (修多羅)」「経」に応じて重ねてその義を述べた韻文。「ヴィヤーカラナ (和伽羅那)」「授

記・記別)は、弟子に対して、未来に成仏するであろうと予言すること。「アドブタダルマ(阿浮陀庵磨)」「未曾有法)は、仏の神通力を説く経文。

- (6) (原注) これらの点については以下を参照のこと。M. Allon, *Style and Function: A study of the dominant stylistic features of the prose portions of Pali canonical texts Sutta and Their mnemonic function*. Tokyo, The International Institute for Buddhist Studies of the International College for Advanced Buddhist Studies, 1997.

- (7) 「梵網」とは「梵天の網」の意味であり、聖なる智慧によって、あらゆる思想を網羅するとされる。パーリ語聖典の『梵網経』には、仏教が外道とみなした当時の思想が「六十二見」として網羅されている。漢訳された『梵網経盧舍那仏説菩薩心地戒品第十』(梵網経)とは内容が異なる。

- (8) マガダ国ラージヤガハ(王舎城)の長者の息子シンガーラ(シガローヴァダ/善生)に対して、釈迦が正しい礼拝の方法などを教える。類似の内容をもつ経典が幾つかあり、その通称である。

- (9) 経分別は、「パーリ律」において出家者が守るべき規則について説明したもの。注4を参照。

- (10) 三蔵は仏典を律蔵、経蔵、論蔵の三つに分類したものであり、パーリ仏典の経蔵は五つの部 (*nikāya*) に分かれる。その初めの四つが、それぞれ漢訳『阿含経』の「長阿含経」「中阿含経」「雜阿含経」「増一阿含経」

に対応する。しかし、最後の「クツダカ・ニカーヤ」は漢訳では相当する経文が散在し、大正新脩大藏経では本縁部(第三・四卷)に概ね集められている。

- (11) 「ウターナ」(無問自説)は、聴衆の問いを待たず仏が自ら説いた経文。「イティヴツタカ」(本事)は仏弟子たちの過去世の因縁を説く経文。「ガーター」(偈)は、長行によらず偈頌で説いたもの。

- (12) クツダカ・ニカーヤ(小部)の一部である「スッタニパータ」の第一章第三節。四十一句から成り、その末尾が全て「犀の角のようにただ独り歩め」(中村元訳)と結ばれる。

- (13) 『般舟三昧経』『首楞嚴三昧経』『観仏三昧海経』などがある。

- (14) サティア・ナラヤン・ゴエンカ (Satya Narayan Goenka 一九二四―二〇一三) は、ヴィパッサナー瞑想の在家指導者。ミャンマー出身。

- (15) Janhupati の Janhū は閻浮(提)、pati は主人であり、閻浮提の王の意味。傲慢で暴虐な王を、ブツダ自ら「王の中の王」として調伏して改心させ、仏弟子とする。同様の内容の物語は、ビルマ、ラオスなどにも伝承されている。

**Nahini Balbir** / パリ第3大学(新ソルボンヌ)教授(インド学)。フランス国立高等研究実践学院(Ecole pratique des hautes études)教授(古代インド文献学)。専門はジャイナ教、テーラワダ仏教のパーリ語聖典。サンスクリット学習法に関する執筆や、ヒンディー語・グジャラート語の詩や短編小説の翻訳も手がける。イラン・インド世界の研究ユニット「UMR 7528」のメンバーであり、多数の書籍・論文を発表している。